



東月地初編

山田 虎 貞 氏
藏

Gōkan: (No. 3906
Azuma Nikkō
Book 1--10
1





中橋
山田屋
壽梓

門 へ 13
3906
巻 1

重宝記

胎衣を納むる所の男の墨筆筆女の糸針をいれて其年の天徳星
月徳星の吉方ふむひて深く埋り三声笑つて埋るる吉法
尤人のふるぬ雨人埋りそのうへをよく築たてておるれば
そのま長命を病ありこれを鳥獸が
掘りて食ひそのまを死をまる
虫が食ひ火中ふ捨れば悪瘡疥病
されば社廟汚水井戸電街ちうふ
うぐむらうらだの一人のさふ極くさるればその
主育とば又これ成業ふ用ゆるのあんどはあ
このせまふたてん 天子の御後衣の箱を山加茂
吉田山との二所へ納めらるるくはねてあつたてん

胎衣



御所奉公東日記初編序

夫天下ふ大戒二有其一命也其一義也子の親を愛ひ命也
臣の君ふ事の義也左あり源右幕下後二代三代の時政我
思へ其治亂草の葉の戦々と表裏するが如し然ど君を
犯者の梶原をえりて多く誅せらる唯々無慙の死と遂
なる二代の羽林三代の君及び畠山父子和田の一族局松島女
る是等の物語りいと長れば編とふるに
孝の手本ともあせ先此初め時政夫婦の奸悪重成の
密謀不道放逸を誌せり

嘉永七甲寅
初春新鵲

万亭應心賀識



鎌倉代武將右大臣實朝卿

此君頼朝卿の二男
頼家卿の御舎弟
あて明君小
ゆしと

實朝卿御臺所

此姫坊門前大納言信清卿の
御娘あり京都より元久元甲子年
二月十日小餘倉へ御下着あり
實朝卿まゝり后落飾りあり



和歌の
道
元久
元年
正月
廿四日
公曉
公

金禪師
小弒
せらる
干時
御年
二十八歳

北條時政室牧方

此奥の時政の後妻あり
邪智奸
悪むて

尼御臺老女阿波局

此女中誠忠の意あり
實朝卿毎々御危難を
免れ此者の働は



此女中誠忠の意あり
實朝卿毎々御危難を
免れ此者の働は

云以前諸臣の
誅戮を助け御所
此女中の難を救い
頼家卿のりまは
は姫をり其心
あつ常の女の及ぶ
所小あり

忠臣の重忠義成を
誠忠の臣と誣し頼家
卿を殺させ又実朝に
その毒殺せんと計し
孫の時政の忠義あり
其企
自ら
死

北條遠江守平時政

此臣の鎌倉草創の
武士の元
悪多の娘
政子頼朝
郷御堂



ある更二代の
君の執権とある元久
二年閏二月廿悪多の娘を入道
明盛と号伊豆の北条に住む七十八歳を
船毛三郎重成
卒を子孫執権の
職を續り
此臣の畠山重忠の從弟ゆゑに
忠臣の似ゆゑに悪多の娘ゆゑに諸臣は忠義を
諒し重忠の一族と認めたり無愁の死を遂ぐ終ふ

悪逆
露頭
及び
諸臣の
又小
刺る

尼御堂政子御前

此御方の時政の娘也聰明多し聊
嫉妬の愚念あり二代平の君ゆゑ
簾中を政子と聞えり尼將軍
との法名を如實と号し上洛と
從三位とあり又二位ののち
六十九歳あり
嘉祿元年
七月逝去

頼家郷遺紀念姫君



此姫の頼家郷召仕
女中の密ふゆゑ
をかり
君他
東の
翌年
御出生あれど
御身弱ふありゆゑ尼公あつてのつらひ廿八歳のとき
四代の君の御堂とありて竹御所比企谷に住むゆゑに
御年十五
御年十六

善哉君 后公 公亮禪師

重長の娘あり四歳のとき父を殺されぬて并寺の
公亮僧正の弟子となり公時と号し鶴岡若宮
別當殿とありぬ以建保五年正月先百

父の仇とて実朝卿
を八幡にて害せ忽
長尾新六誅せ
る御年十九歳

御子あり
御腹あり
加茂あり
六郎あり



鎌倉三平羽林金吾頼家卿 二岳禪室

此君頼朝卿の御嫡男御母公の
平の政子蹴鞠を好み伊豆の奥野の
武將たるふゆつそ伊豆の修善寺小
移られ詭者は為り御自殺あり
御年二十三歳あり



局松島侍女賤機

此女洛外矢瀬の生れぬ知きより松島の
親の恵をうけ契約は夫を見え局小つた
鎌倉小下り松島自害の後より忠義を
尽せり

京上鴈松島局



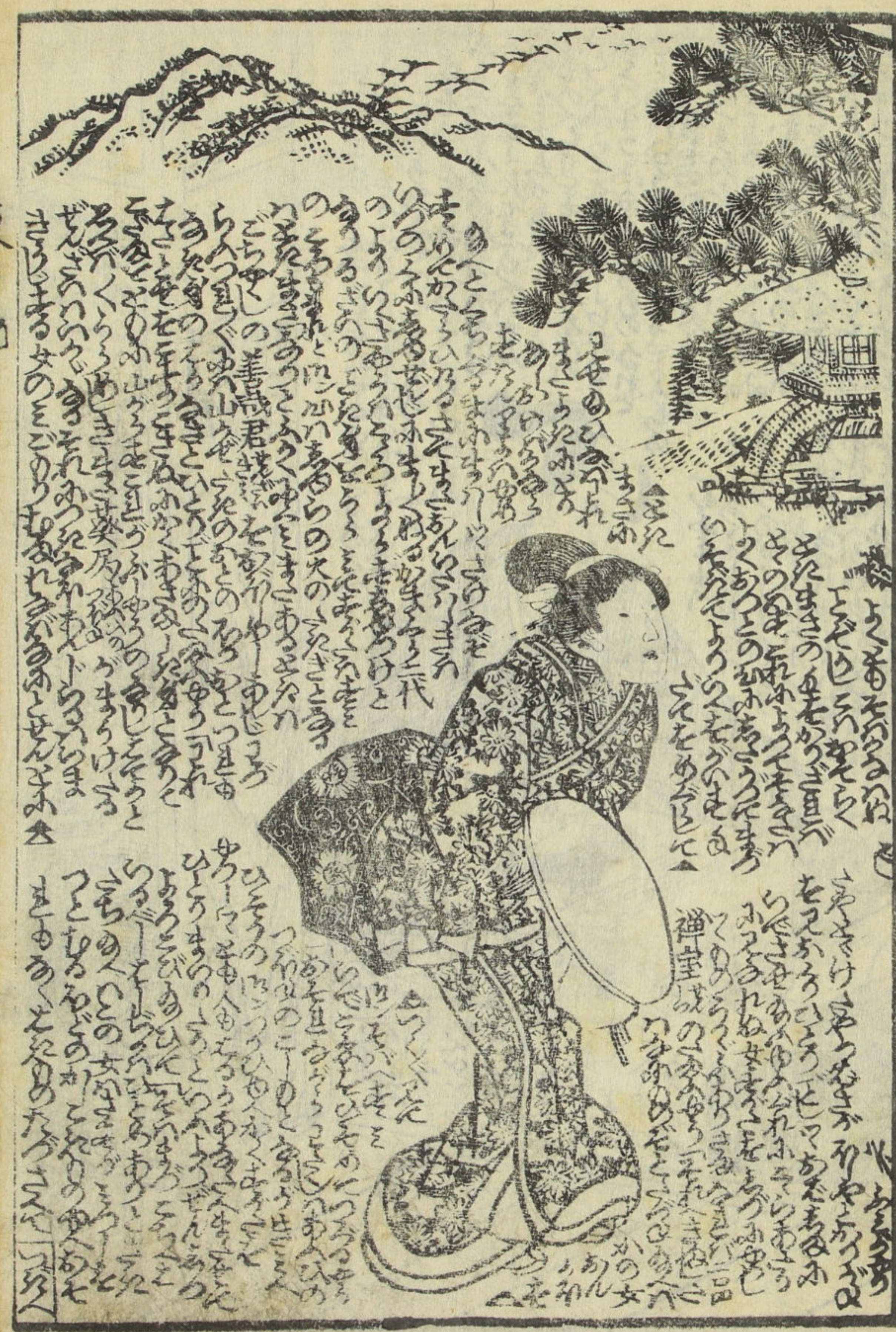
佐渡守
親泰の娘
實朝卿の御臺附下り
和田三男義秀を戀せし終ふ其約を盾御臺小
妨げられ貞操をあらうり自害せり
御臺所(書置)の末小詠る

義秀の
書置の
末小詠る
おのし
せの
うまき
しあひの
わつし
君こそんあや
おのの
ちんちん



せうちうまはこれと
 ままおん
 ちうまはこれと
 ままおん

あかしの
 ちうまはこれと
 ままおん
 ちうまはこれと
 ままおん



あかしの
 ちうまはこれと
 ままおん
 ちうまはこれと
 ままおん

あかしの
 ちうまはこれと
 ままおん
 ちうまはこれと
 ままおん

己未春錦橋堂新板

寢小便大奇藥 一包代
三百銅
ねいせんのすまや
いんをきくたの病を治す中女小兒
田女とも一包代治るる良方あり

白妙 一包代
廿二銅
清淨 去ろえ
精製
まろい入用おれは
白くあるゆゆたの

口中固齧散 大包代百銅
小包代三銅
御藥
一ぬけを一うねと一うみ血
功 一血りづ一えささえま
能 用かすのうまふはくおまひ

全庄錦繪 江中橋廣小路
山田屋庄次郎

女甫文手箱 中本形
全冊
山東菴京山作

雛鶴笹湯壽 紅摺
大本 一冊
一陽齋豊國画

源氏一猛圖會 全同
一冊
撰 画

紅梅百人一首 半紙本全一冊
女用文章入

美玉百人一首 中本形全一冊
女用文章入

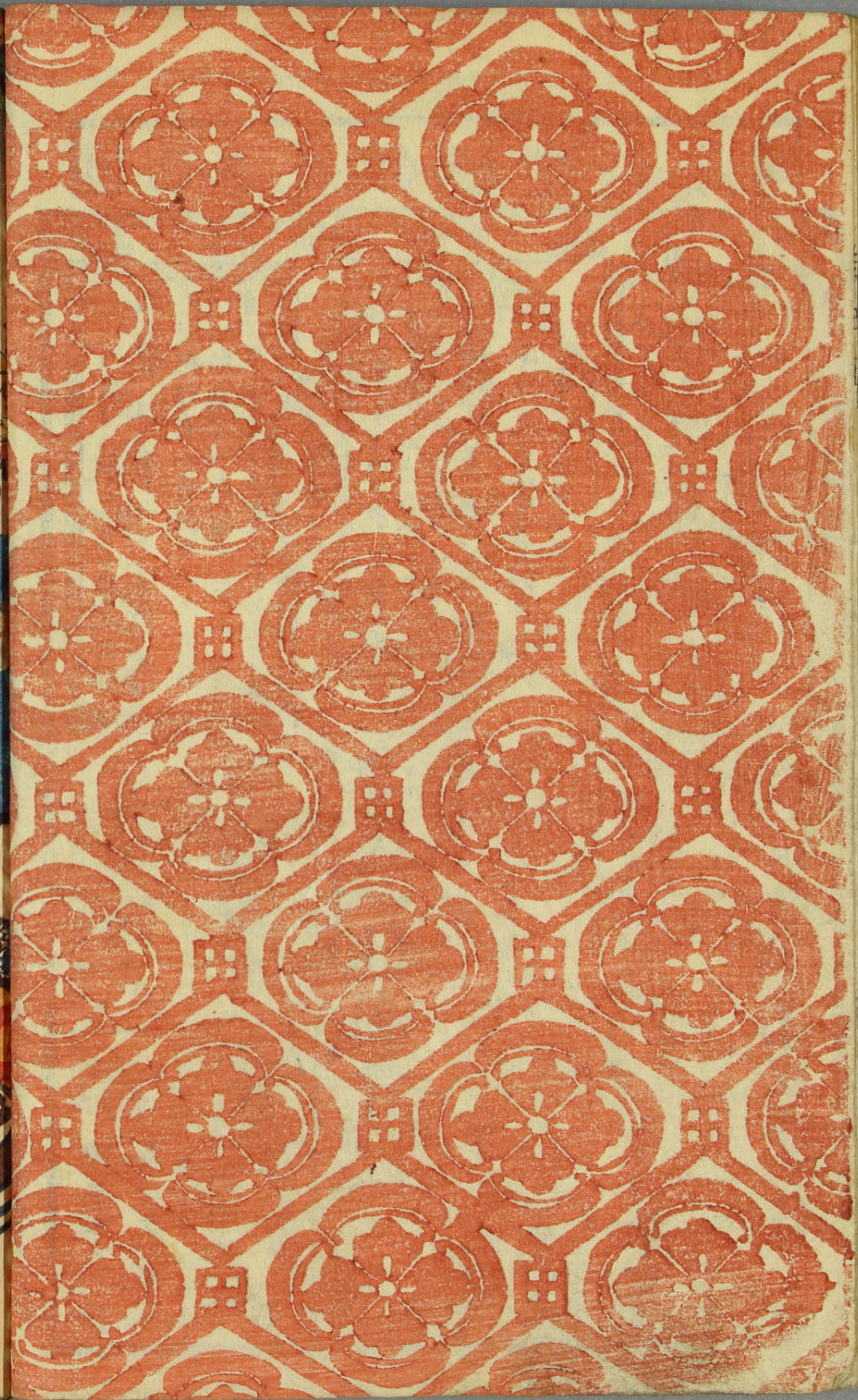


一猛齋芳虎画



万亭應賀作

下



この国は山と谷の間にありて
その地は草木の茂る所なり
其の風土は温帯なり
其の人民は
其の言語は
其の風俗は



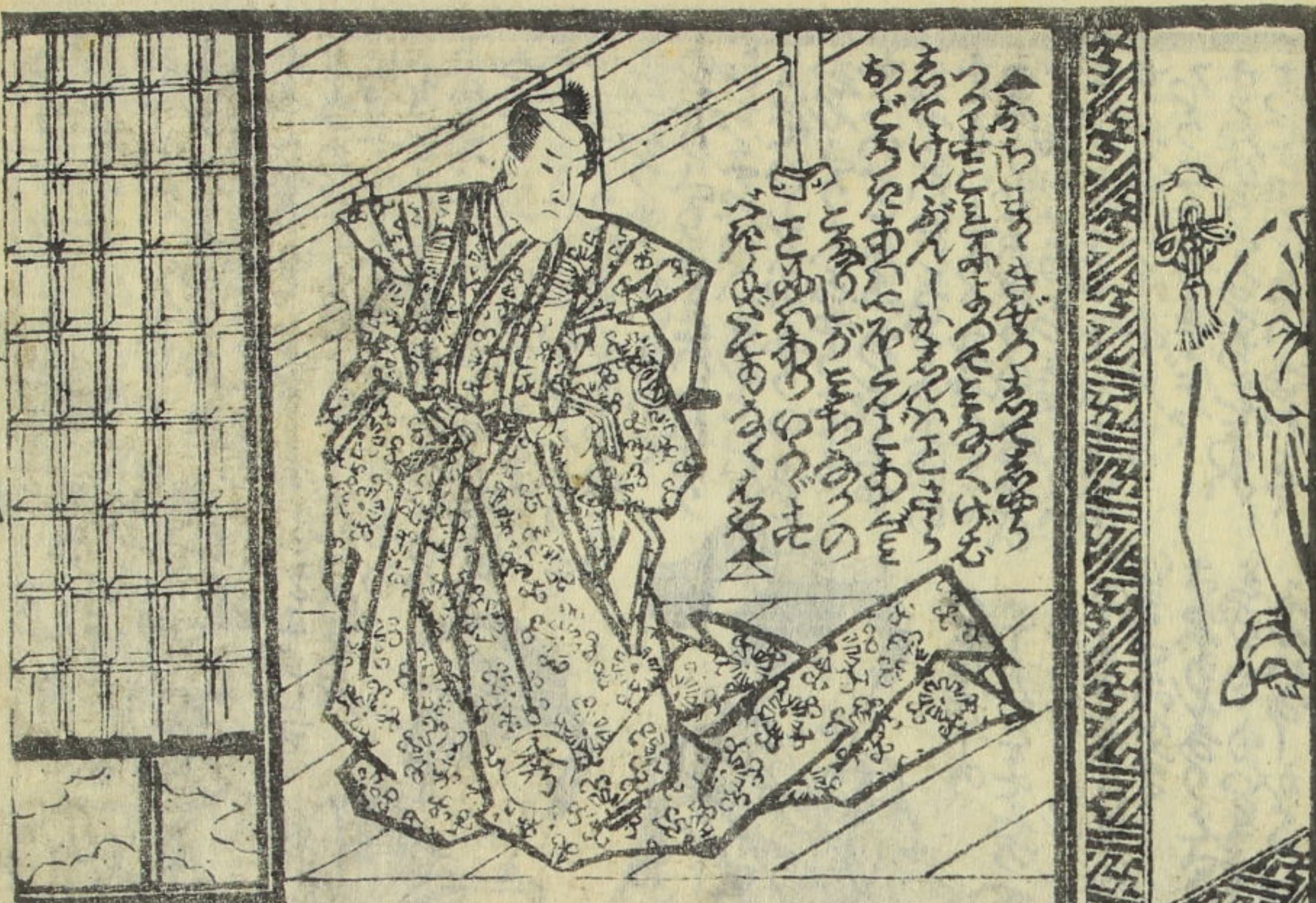
此の国は山と谷の間にありて
その地は草木の茂る所なり
其の風土は温帯なり
其の人民は
其の言語は
其の風俗は

此の国は山と谷の間にありて
その地は草木の茂る所なり
其の風土は温帯なり
其の人民は
其の言語は
其の風俗は

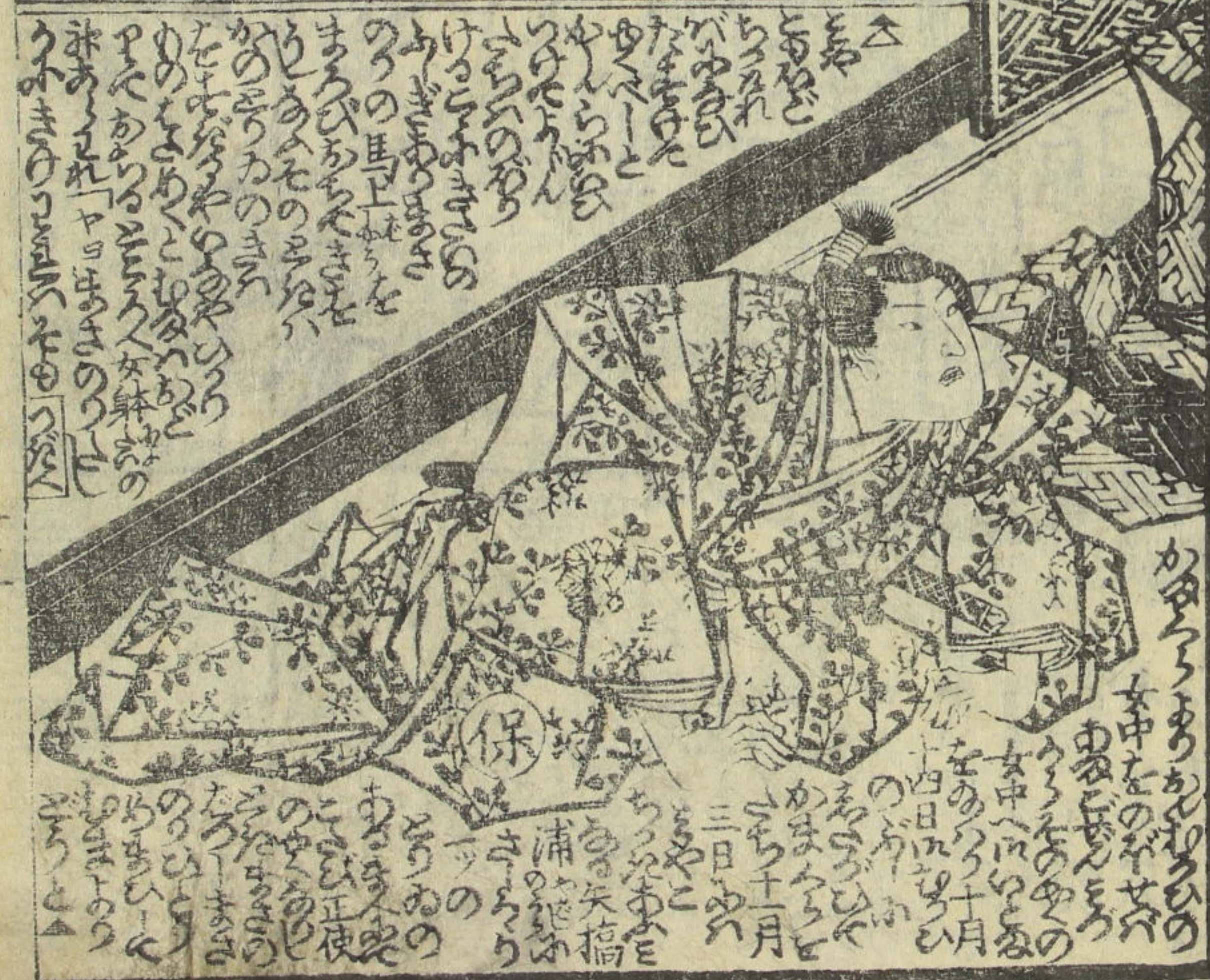
この国は山と谷の間にありて
その地は草木の茂る所なり
其の風土は温帯なり
其の人民は
其の言語は
其の風俗は



この国は山と谷の間にありて
その地は草木の茂る所なり
其の風土は温帯なり
其の人民は
其の言語は
其の風俗は



つらきことばをいふ
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま



あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま

あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま



あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま
あてけんがうらやま

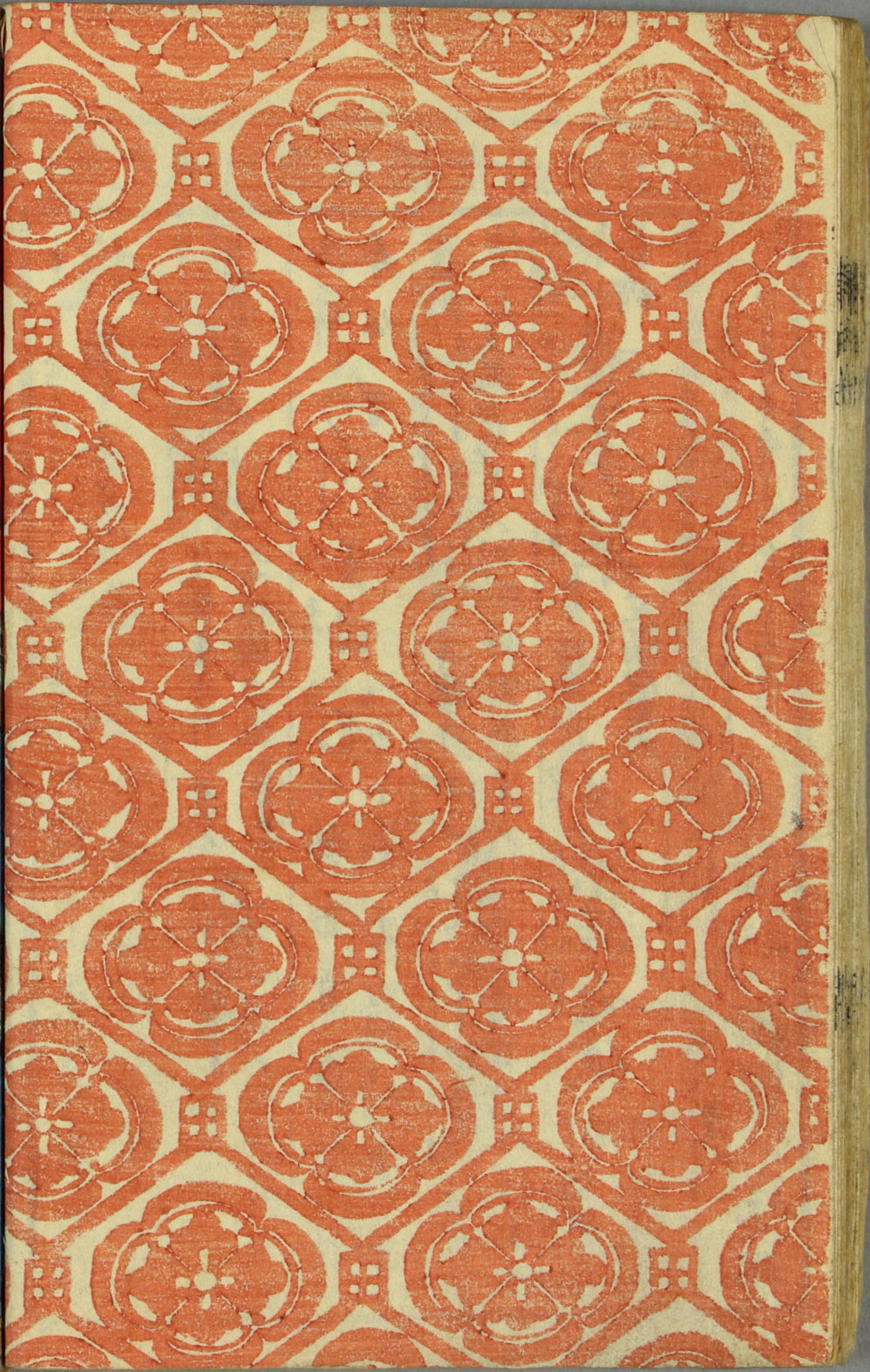
万亭應賀作



あいまい日記二編

中橋山庄版

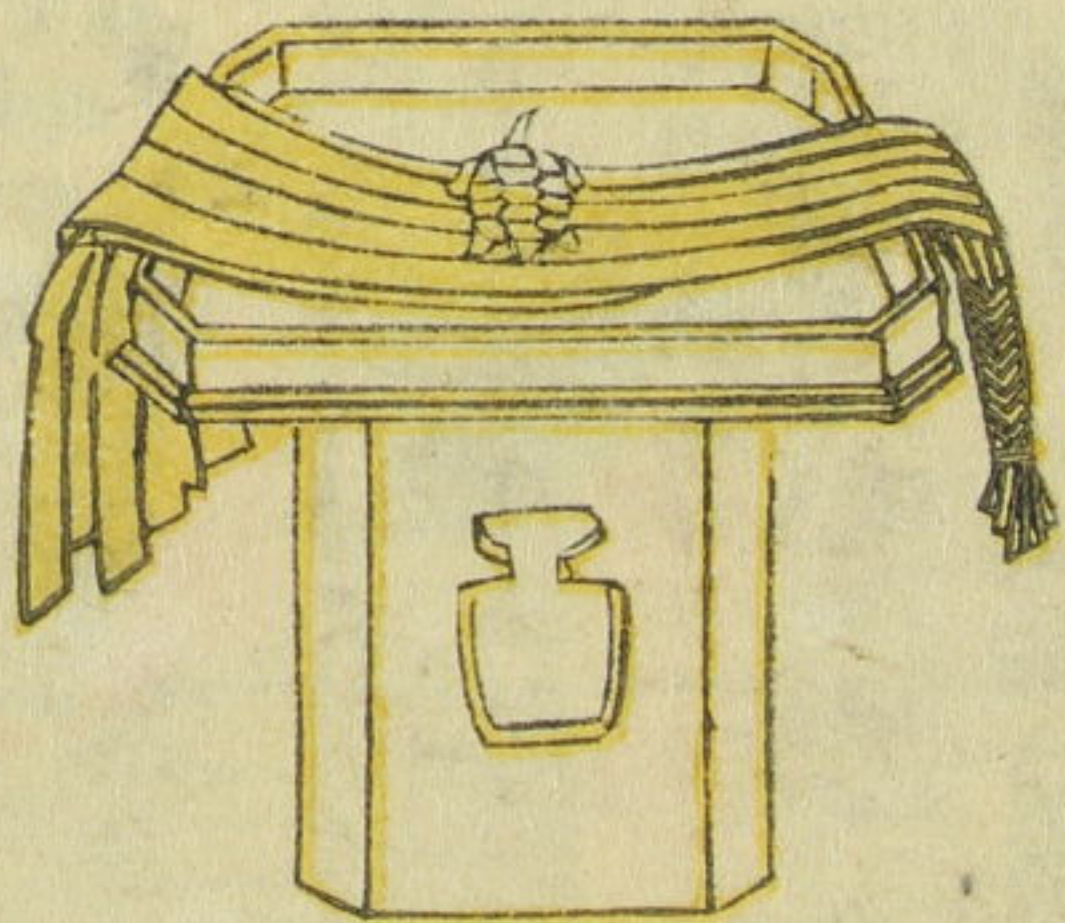
上



重宝記

元服の孫の髪を袴着帯を
 昔の日の日に限るべし
 十一月十五日に限るなり
 吉日を撰べとふ
 陰陽師の書より
 此日をりて年中祝ひ事
 大吉日あり

正月十日 二月九日 三月七日 四月五日 五月三日 六月朔日
 七月廿五日 八月廿日 九月廿日 十月十日 十月十五日 十月廿日



御所奉公東日記二編叙

夫親子兄弟といふも其性の違あると近き先皇清盛重盛の父子あり其
 行粧の善と悪と諸書小出て能人の知所叔鎌倉の時政あり二位の禪尼
 時政夫婦息義時あり其行不正ありと泰時時頼の聖賢ありて
 政道をよく正す又重忠重保の父子及び義盛義秀の父子ありて其
 性更劣劣君を重んず下を哀れども重忠の従弟あり重成小仇せり
 義盛も従父兄弟あり義村の不義不かり此兩家の一族等一時小滅
 亡するると天命とい言ふから誠忠無二の士を豈天道の助する神
 佛より守らざる是の所謂佛家小釋過去の業とものべたる左
 あり善の善ありて悪の悪ありて未代まで其名の朽ぬを思ふべし
 此史も童女達小見せりて聊善と勧りの小こと

嘉永五壬子夏稿成
 同 七甲寅初春発市

万亭應賀誌

後京極攝政藤原良經郷北政所

頼朝卿の姉君権中納言藤原の

能保卿の簾中にて此君を産めい

浪經卿へ嫁させぬ鎌倉三代

實朝卿とて後弟の御續あり

御臺所小附ありて鎌倉小

尼御臺中老環局

此女中へ阿波の局の

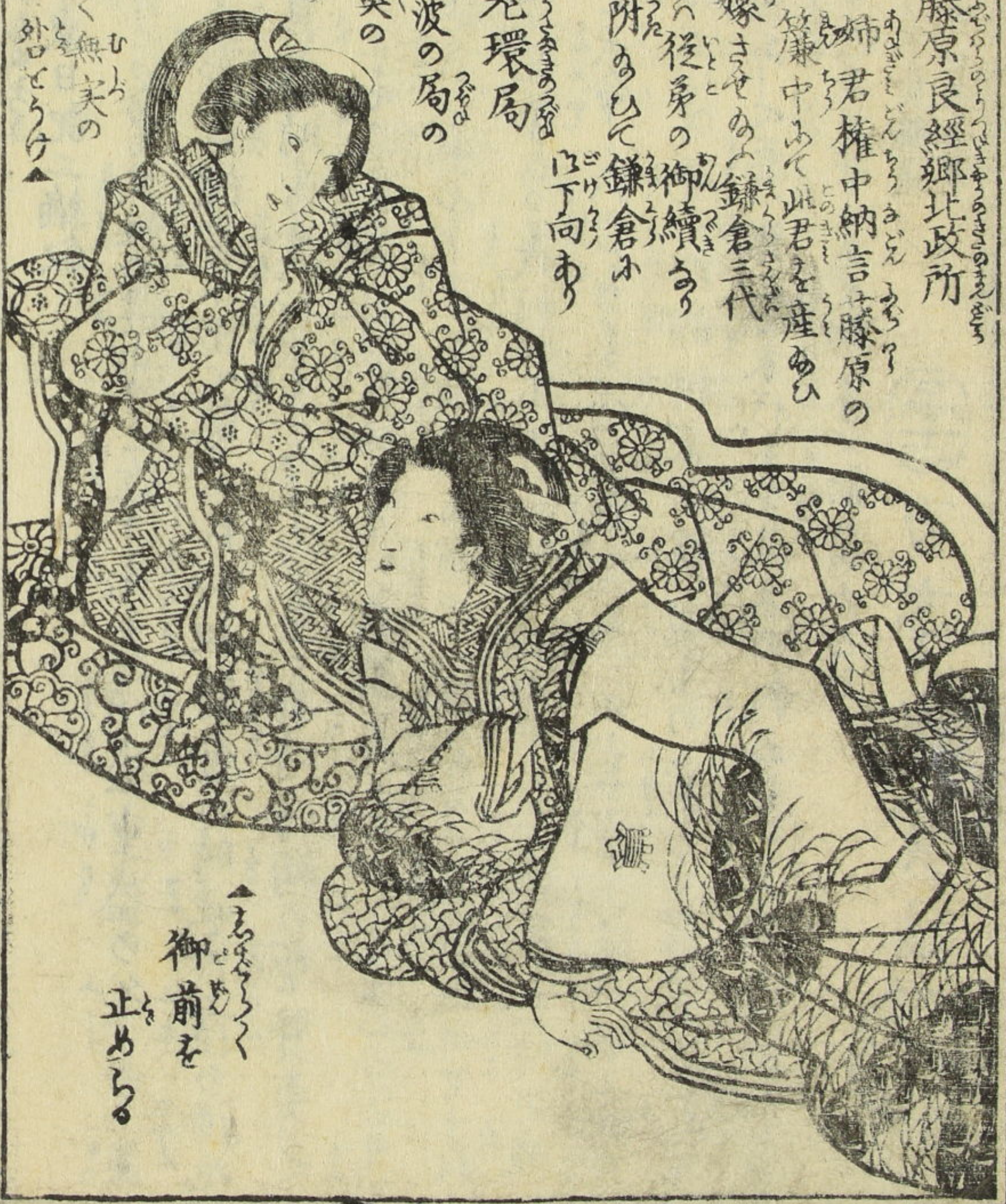
次小つた大奥の

支配をつとめ

尤忠義の

者されども

牧の方の
諛言よめく無美の
外口とらけ



御前を
止めらる

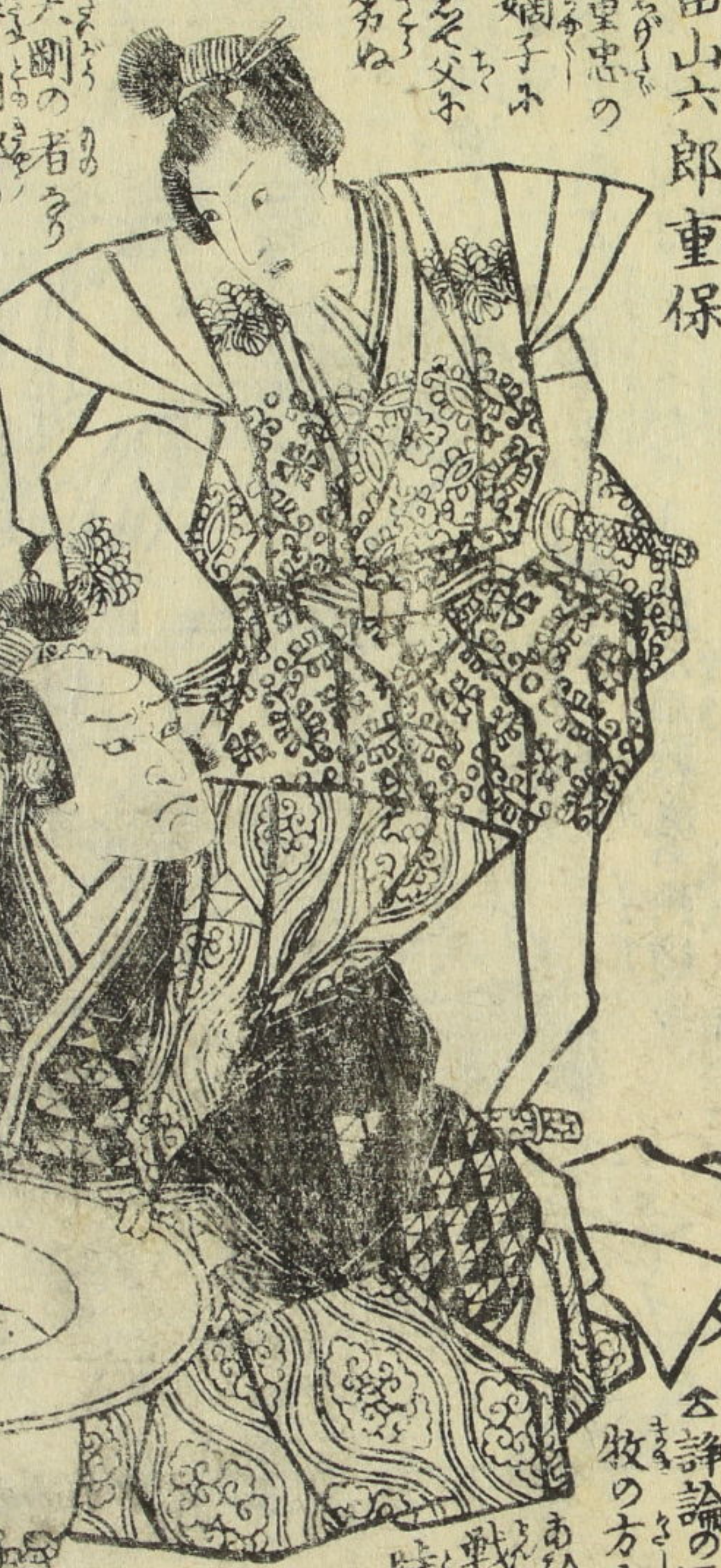
白山六郎重保

忠忠の

嫡子小

長父小

岩ぬ



大剛の者きり

實朝卿の

御臺所御迎お登りて京の守護人

相摸次郎朝時

比奈義時の次男泰時の身元好色ありて

御臺所の上臈松島と戀慕し義秀と

工のり 後小名越式部丞とのみ

云 諍論のこころい
牧の方重成の諍不
あひ由井原小
戦死せりとの
時元久二年

六月
廿一日



朝比奈三郎義秀

和田左衛門尉平義盛の

三男也母ハ巴女

勇剛

忠孝及

五世帝を

重頼

美

男



時政郎等千賀九郎

牧の方の腹心也其の悪を働きた元久

二至一閏七月十九日北条各越の亭に涼風歌道の御遊あり

此時實朝卿を討奉らんとせし以結城七郎朝光を生捕り

一屆松島をゆく意慕し其の嫁先死

野のしが尼君の妨げられたるは建徳

元年和田合戦の勇将也大敵を

討ち

一門 房州 渡り 又外国 小行 云と

和田左衛門尉義盛妻巴女

此婦人天下の未曾有の

美也其の義盛生捕て

軍功の賞ふ

又て主なり

妻とせりて不

武勇美人の

聞え

隠は

これ

義秀の

母あり



浅利與市源
義遠妻坂額女

越後國の住人城九郎

以資國の娘なり其の武勇

大カカ

烏坂

合戦

不

大軍

を討ち

市

生

捕

て

終

つ

妻と

なり

この世は... 女中... 山... 二人...

二人... 山... 女中... 二人...

二人... 山... 女中... 二人...

二人... 山... 女中... 二人...

二人... 山... 女中... 二人...

二人... 山... 女中... 二人...



Vertical columns of handwritten text in a cursive script, located at the top of the right page.



Vertical columns of handwritten text in a cursive script, located at the bottom of the right page.

Vertical columns of handwritten text in a cursive script, located at the top of the left page.



Vertical columns of handwritten text in a cursive script, located at the bottom of the left page.

戊午春錦橋堂新板

口中固齒散 大真百編
 功一血のりる 一入のりる
 能一用の本のりる

精製 白妙 一包代 二銅

練少演の不可藥

浮珠鳥龍連 五編空中樓閣咲作
 捕一陽齋畫

萬葉九重錦 捕一陽齋畫

英雄五分 捕一陽齋畫

維多利亞壽 紅橋山東畫
 捕一陽齋畫

青川文壽相 本形山東畫
 捕一陽齋畫

庄地本 橋廣小路
 山田屋庄次郎



應賀作芳虎画



一猛齋芳虎画



重宝記

○やけどとまゝるとたの早く火鉢の

火の中^ひの灰^{あし}のかさまり

湯の中^ゆへりれをねんつゝまじ

らふよりまがら

大妙業あり

○病犬^{やまぬ}み^み食^くれ

たら^{たら}業^{あひ}のさ^さめぐあれども

取^とらてよなるをゆる^{ゆる}唐^{たう}仁^に成^{じやう}者^{しやう}で

ま^まりつゝ一^{いち}斑^ま口^{くち}へた^たりつゝその上^{うへ}へ灸^{しやう}を

ま^まをよ^よし^しは^はおの^のり^りなく^くつ^つてお^おう^うげ^げれ^れば^ば脚^{あし}の

ま^まふ^ふ合^あは^はれ^れ人^{ひと}の^の為^{ため}ある^るもの^の何^{なに}も^もあ^あら^らず^ずに^にま^まじ^じら^らせ^せよ^よと



Vertical text columns at the top of the right page, likely serving as a preface or introductory text for the scene below.

Vertical text columns on the left side of the right page, positioned above the illustration.

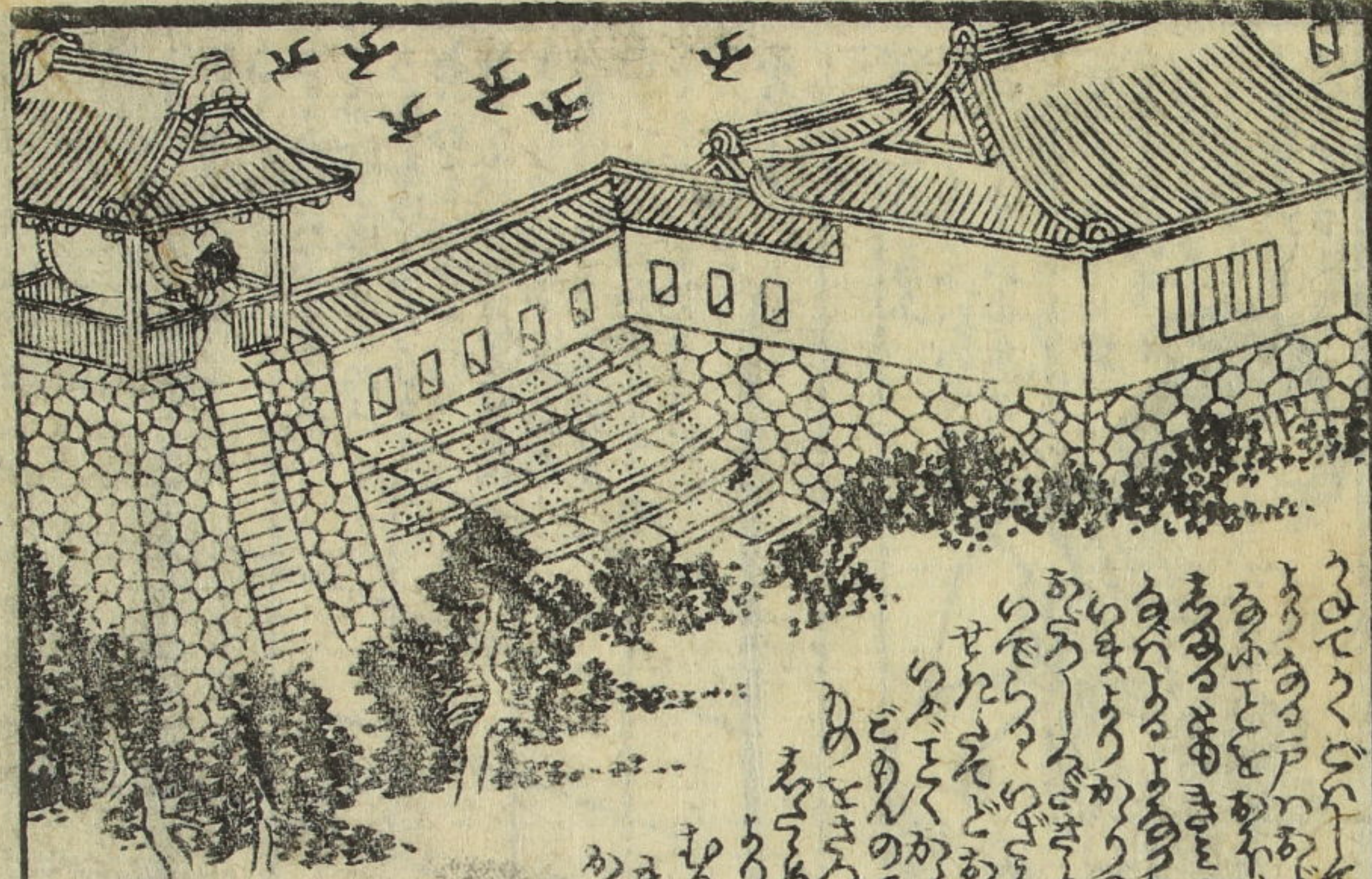
Vertical text columns on the right side of the right page, positioned below the illustration.

Vertical text columns at the top of the left page, likely serving as a preface or introductory text for the scene below.

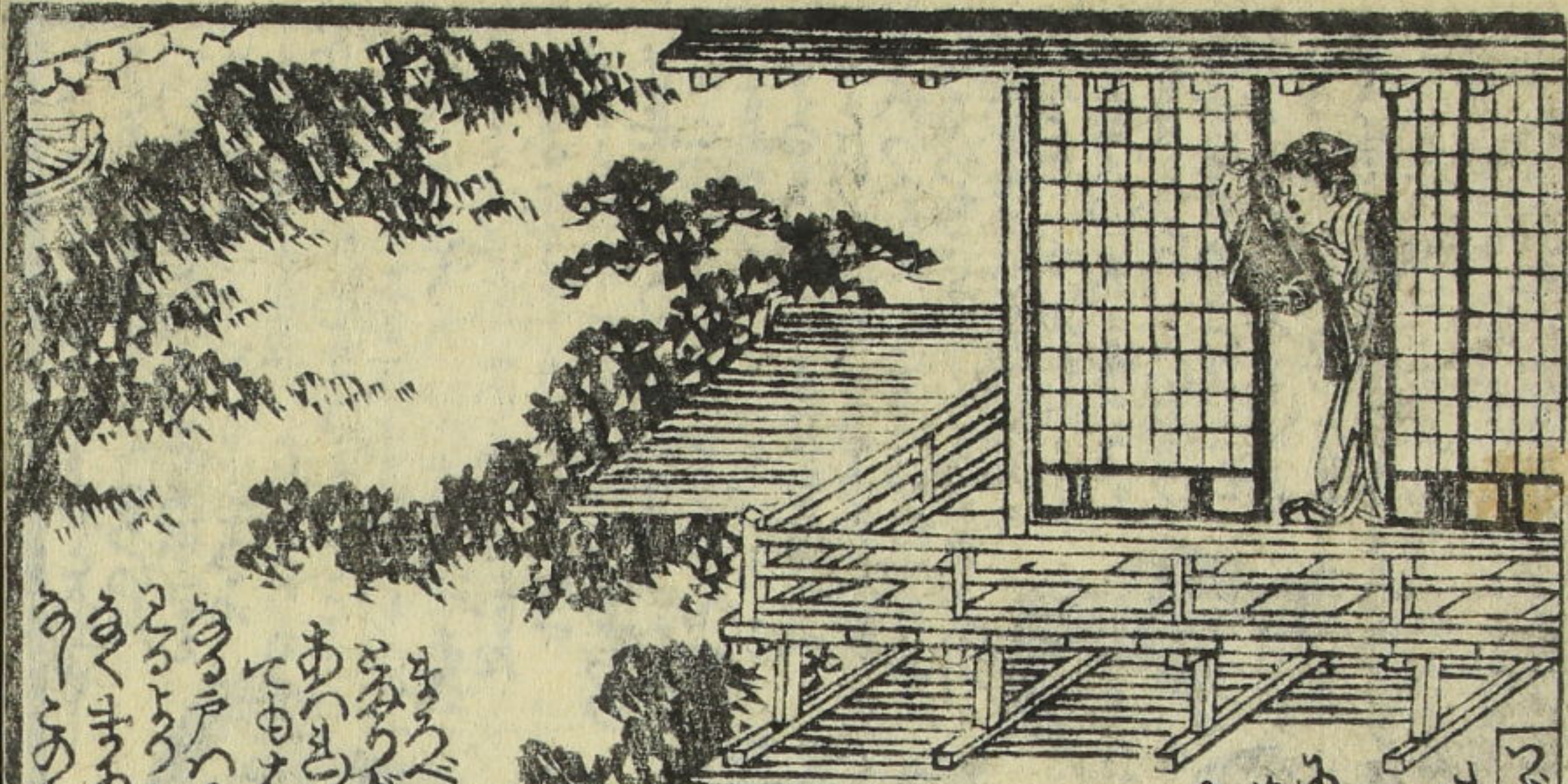
Vertical text columns on the left side of the left page, positioned above the illustration.

Vertical text columns on the right side of the left page, positioned below the illustration.





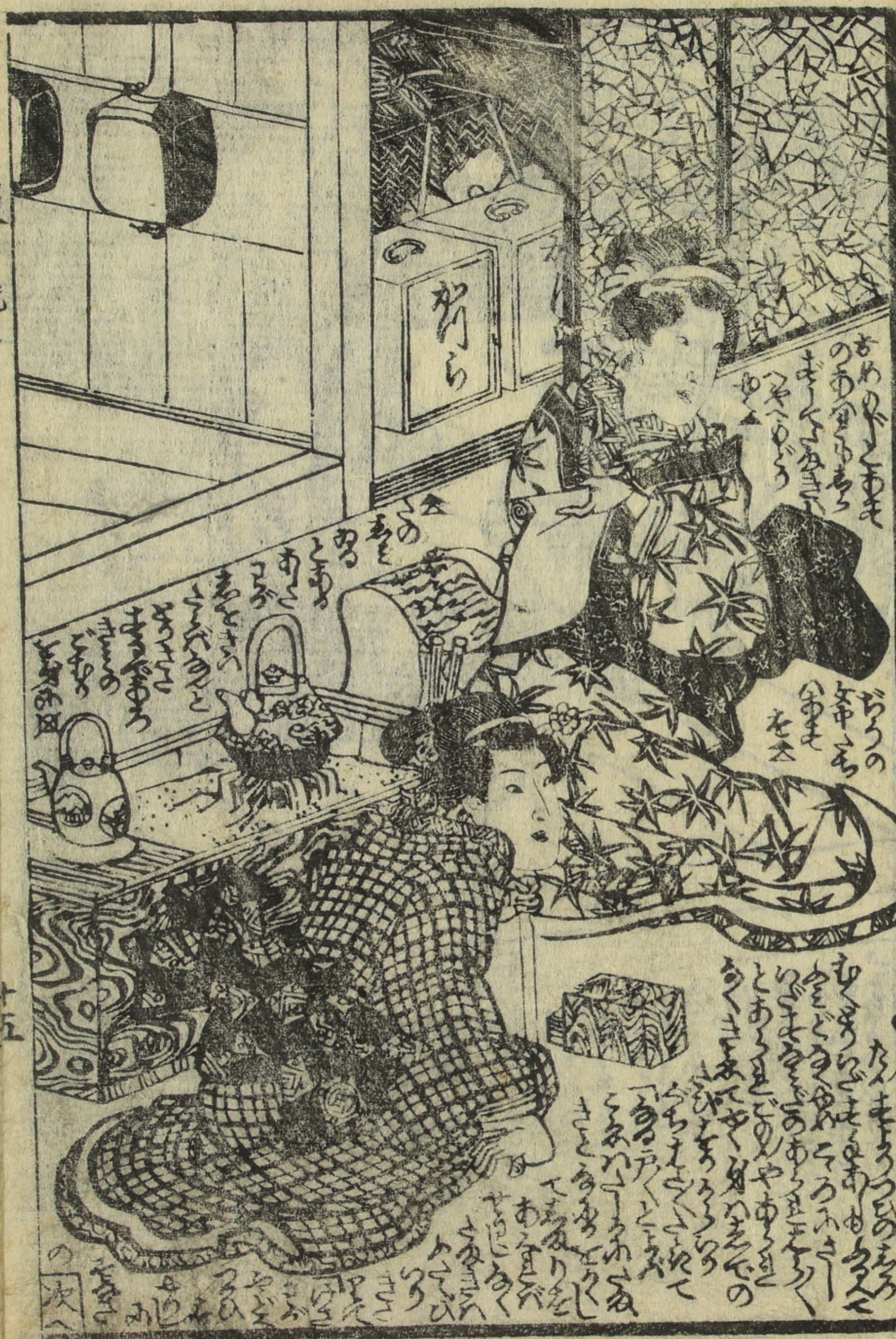
Handwritten text in a cursive style, likely a form of Japanese calligraphy or a specific dialect. The text is arranged in several columns, starting from the top right and moving downwards. Some characters are larger and more prominent, possibly serving as section markers or key words. The ink is dark and the paper shows signs of age.



Handwritten text in a cursive style, similar to the left page. The text is arranged in several columns, starting from the top right and moving downwards. A large illustration of a person in traditional Japanese clothing is integrated into the text, sitting in the middle of the page. The person is wearing a kimono with a circular emblem on the chest. The text continues around the illustration.

東田

十一



つぎまのせん
十賀坊九郎
みありの馬の
るまをかくて
あまき
あつたあ
くの

いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ

いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ

いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ

いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ



いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ

いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ
いふ



Handwritten text in Japanese, likely a commentary or description of the figure, located at the top of the left page.

Additional handwritten text in Japanese, continuing the commentary or description, located at the bottom and sides of the left page.



Handwritten text in Japanese, likely a commentary or description of the seated figure, located at the top of the right page.

Additional handwritten text in Japanese, continuing the commentary or description, located at the bottom and sides of the right page.

狂言番組
 一 青史
 一 小倉山
 一 せいの声
 一 角力
 一 汐々
 一 老松
 右邊お菊
 五月日

△イヤゴたんへんのなまは
 せいふよりくろのこころあわめ
 まがもまよりまがもまがもまがも
 つまもまよりまがもまがもまがも
 のひまのあまのまがもまがもまがも
 あまのまがもまがもまがもまがも
 ろくまのまがもまがもまがもまがも



一 猛齋
 芳虎画



万の心 虎の心

御所舉
 公東日
 記三編
 紙刻

△なまはのこころ
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも
 まがもまがもまがもまがも

戊午初春錦橋堂新板目錄

教草如房形氣

十七編 山東藤京山作
 十八編 梅蝶樓國貞馬

名香坊 五拾三驛

六編 曹性作
 六編 芳虎画
 名香坊 五拾三驛
 五編 調布作
 五編 同作

津野 河内日記

八編 万亭應賀作
 九編 一猛齋芳虎画

品定五人娘

六編 京山作
 七編 芳虎画
 結鹿子紺屋説
 三編 花咲作
 四編 豊園画

足利情手深此巻

十九編 松亭金水作
 二十編 梅蝶樓國貞画

造榮櫻叢紙

十編 梅彦作
 芳虎画
 庄
 地本 錦繪問屋 江戶中橋廣小路 庄兵衛次郎 山田屋庄次郎

